

令和4年度 栄東中学校入学試験問題

東大特待I(1月12日)〔国 語〕(50分)

受験 番号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、**問題用紙**と**解答用紙**のどちらにも**受験番号**と**氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で26ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。

一 次の（ 1 ）（ 5 ）に当てはまる最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、

語群の言葉は一度ずつしか使いません。

- ・ 物事の（ 1 ）を判断する。
- ・ この映画の（ 2 ）収入は、歴史的な記録を作った。
- ・ 彼の（ 3 ）がない行動に嫌気がさした。
- ・ （ 4 ）寝坊をしないとちかう。
- ・ 彼は（ 5 ）の天才だ。

【語群】

セツソウ	ケイチヨウ	コウギヨウ	コンリンザイ	フセイシュツ
------	-------	-------	--------	--------

二 次の（ 1 ）（ 10 ）に当てはまる最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は

一度ずつしか使いません。

- ・ 人生の大きな（ 1 ）に立つ。
- ・ 心の（ 2 ）にふれる素晴らしい演奏。
- ・ 会社についての悪い噂が（ 3 ）していた。
- ・ 本題に入る前に、計画の（ 4 ）を説明した。
- ・ オリンピック招致活動に協力するのに（ 5 ）でない。
- ・ 彼は現場で苦労を重ねてきた（ 6 ）の職人だ。
- ・ ハイキングにでかけるには（ 7 ）の上天気だ。
- ・ 日本人は昔から自然に（ 8 ）の念を抱いている。
- ・ 社会的な不平等をなくすため（ 9 ）について学ぶ。
- ・ 自分の意見が（ 10 ）だからといって正しいとは限らない。

【語群】

ア 流布	イ 岐路	ウ 琴線	エ 畏敬	オ あらまし
カ たたき上げ	キ やぶさか	ク おあつらえ向き	ケ ジェンダー	コ マジョリティー

三 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。なお、設問の都合上、一部の記号を省略しています。

「問い、考え、語り、聞くこと」としての哲学^{ていがく}において、もっとも重要なのは「問うこと」である。「問い」こそが、思考を哲学的にする。**A**、「今日は何しようかな、疲^{つか}れてるしなあ、今週中にあれ片づけなきゃいけないのに、……そういえば、昼ご飯、何食べよう？」——こういうのは「考える」ということとは違^{ちが}う。頭の中で何となく思いが巡^{めぐ}っているだけである。「考える」というのは、もっと自発的で主体的な活動を指す。それは「問い」があつてはじめて動き出す。問い、答え、さらに問い、答える——この繰り返し、積み重ねが思考である。それを複数の人で行えば、対話となる。

問いによって考えるようになるということは、何をどのように問うかによって考えることが変わってくるということを意味する。つまり、問いの質によって思考の質が決まるのである。そして、どのような問いをつなげていくかによって、思考の進み方が変わる。漠然^{ぼくぜん}としたことしか考えられないのは、問いが漠然としているからだ。抽象^{ちゆうしょう}的なことばかり考えるのは、問いが抽象的だからだ。明確に問うことができれば、明確に考えることができ、具体的に問えば、具体的に考えられる。考えが同じところばかりグルグル回つていて、先に進めないのは、問いに展開がないからだ。

「何かいいことないかなあ」と考えているだけでは、いろんなやさそうなこと、楽しそうなのが頭に浮^うかんでは消え、「あーあ、つまらないなあ」とグチるだけになる。その代わりに次のように問いをつないでみる。

「いいことってどういう意味だろう？ 楽しいこと？ ためになること？ 誰^{だれ}にとっていいこと？ 誰にとって楽しいこと？ 自分にとって？ みんなにとって？ みんなって誰？ 自分はどんな時に楽しいと感じる？ 最近楽しかったのっていつ？ 自分のためになることって何？ 自分に必要なもの？ 何のために、いつ必要なもの？……」

こうして問いを重ねていくと、考えが前進¹する。**B**、「いいこと」が具体的に見つかるかもしれないし、やらなければいけないことがはっきりして「いいことないかな」などと考えている場合ではないと思うかもしれない。いずれにせよ、先に進める。

「何であの人はこんな面倒^{めんどう}なことばかり頼^{たの}んでくるんだろう？」と思っただけでは、鬱陶^{うつとう}しい、非常識だ、ワガママだ、いい加減にしろー等々と、心の中で相手をののしるだけだろう。そうではなく、こんなふうに問うてみる。

「あの人が頼^{たの}んでくることって本当に必要？ なんで私はそれを面倒だと思うの？ あの人の言うことっていちいち聞かなきゃダメ？ あの人の付き合^いって私にとってどれくらい大事？ 断^{ことわ}ったらどういう問題^{問題}が起きるの？……」という具合に。

ひよつとすると、あの人が自身^{自身}が何か別の問題を抱えているのかもしれない。**C** 私が過^か剰^{じょう}に反応して、必要以上に言うことを聞こうとしているのかもしれない。それは私が気弱で断れないだけかもしれないし、他人に「いい顔^顔」をしたいだけかもしれない。結局は断つても大したことがないのであれば、問題はどうかやって断るか、だけなのかもしれない。それも、もっともらしい言い訳^訳などせず、一言「忙しいから無理^{無理}」と言えはすんだりする。

こうして問いを重ねることで、考えることは広がり、別の角度からものを見られるようになる。哲学的かどうかはともかく、問いは思考を動かし、方向づける。**D**、考えるためには問わなければならない。重要なのは、何をどのように問うかである。

(中略)

世の中には、問いのように見えて、実²際には問いではないものがたくさんある。不満や不安、怒^{いか}りや恐^{おそ}れや苦しみと共に発せられる問いは、多くの場合、問いではなく、拒絶^{きよぜつ}、否定、非難^{非難}、侮蔑^{あべつ}、呪詛^{しゅそ}である。

「なんでこんなことしなきゃならないんだ？」は「やりたくない！」という拒絶であり、「なんでこんなのがいいんだ？」は「いいわけないだろー」という否定、「何を言ってるの？」は「バカなこと言うな！」という非難である。「なんでこんなこともできないんだ？」は「無能な奴だ！」という侮蔑、「なんであんな奴がのうと生きてるんだ？」は「バチが当たればいいのに！」という呪詛である。

こうした問いは、実際にはそれが問いではないということだけではなく、「イヤだ」とか「ダメだ」とか「クソ」とか「アホ」とか、すでに答えが出ている。それなのに、解消されることのない不満と共に埒^{らち}が明かない「問い」としてその人に付きまとう。そのせいできちんと考えることが妨^{さまた}げられている。

この状態から抜^ぬけ出す選択肢は二つある。問うのをやめるか、問いを立て直すか、である。

問いではない問い、考えることのできない問いを考えられる問いに変えられないなら、もう問わないほうがマシだ。何でもかんでも問えばいいというものではない。

問う能力は、人によって違う。手に負えない問いというのは、誰にでもある。問わない、問いを忘れる、あきらめるということも重要だ。とはいえ、それとて簡単ではない。だから「どうしてそんなことを問うのか?」「その問いを問うことに意味はあるのか?」と問う。これで問いから抜け出せるかもしれない。

問うことをどうしてもやめられない、やめたくない、やめるべきでない場合は、もう一つの選択肢になる——問いを立て直すにはどうすればいいのか。

たとえば、「なぜ授業を受けなければならないのか?」(大人だったら「仕事」と言い換えればいい)というのを取り上げよう。これは、学校へ行つて生徒たちから自由に問いを出してもらうと、よく出てくる問いである。本当に疑問に思つて出てきた問いかもしれないが、その背後にはしばしば「意味がないんじゃないか」「つまらない」「退屈だ」「できれば受けたくない」という不満や拒絶がある。

普通の答えは(とくに教師からの)、「受験に必要だから」となるが、当然これで終わりにはならない。続いて生徒からは、「塾で習えば、学校の授業は必要ないのか」という問いが出てくる。あるいは、「自分が受ける大学ではこの科目(理系なら歴史、文系なら理科とか)は必要ないから受けていいか」となる。

教師としては、ここで手詰まりだろう。あるいは、「とにかく勉強しておけば、いつか何かの役に立つかもしれない」と、原理的には否定不可能なことを言うかもしれない。それなら「たとえば、どんな時?」と聞ける。さらに続けることはできるが、いずれにせよ、先生にとっては分の悪い問答だ。

だがここでは、教師をやり込めることが目的なのではない。教師がちゃんと答えられるかどうかも重要ではない。そうではなく、教師も含めていっしょに考えられるような問いになるかどうか、そこから哲学的な問いにしていけるかどうか、である。

ここでも、自分自身をその問いに結びつけてみるといい——「なぜ自分はその授業に意味がないと思うのか?」「なぜその授業を受けたくないのか?」——そんな問いに対してはどう答えるだろうか。「そもそもやることが分からないし、受験で不要だから

分かる必要もないし、結局自分の人生には関係ない」

そこからさらに次のように問うことができる——「受験では不要でも分かるようになる、人生には関係があるようなことは何か?」「それは不要だと思う科目(歴史や理科)について言えば、どのようなことか?」「それは学校で学べないか? 学べないと思えばなぜか?」「そもそも学校で学ぶべきことは何か?」「ある科目で学ぶ意義があるのはどんなことか? その意義とはどのようなものか?」といった具合に。

こうすれば、問いはより深くなり、哲学的になる。堂々巡りをしたり、ただ人を怒ったり憎んだりするのではなく、一歩でも二歩でも考えを進めていける。

こんなこと面倒くさくてやつてられるか!と思うかもしれない。そんなことをやったって、どうにもならない。どうせ授業は受けなきゃなんないじゃないか!——その通り。こんなこと、生徒であつても教師であつても、一人では考える気にもなれないだろう。それどころか、問うことは恐ろしいこともある。もし答えがなかったら、答えられなかったら、どうするのか? あるいは、自分の無力さ、愚かさ(おろ)に直面するかもしれない。ならば、ただ文句を言つて、誰かを責めていたほうがいい。そのほうがずっと楽だ。

だが、答えが出るかどうかは問題ではない。生徒からすれば、授業を受ける意味があるかどうか、先生が納得のいく答えを示してくれなくてもいい。それがまっとうな問いであることを認めてくれればいいのだ。

つまり、疑問を共有することじたいに、すでに大きな意味がある。自分が疑問に思うことを、問うに値しないかのように扱われたり、問うことじたいが間違っているとケシカランと思われたりするの、誰にとつてもつらいことである。自分の疑問がきちんと受け止められること、問うていいのだと認められることが、重要なのである。

そして答えが出なくても、その問いから考えていくことで、恐れや怒りや苦しみ、不満や不安から身を引き離すことができる。そうすれば、その人自身、少しでも自由になれる。

大事なのは、問うことを恐れないことである。最初からいい問いを作る必要はない。とにかくいろいろ問う。そこから問いを積み重ねていく。

ただ、一人ではなかなか思いつかないし、何より退屈だ。だから、他の人と対話をする。自分だけでは思いつかないような問いを

他の人が思いつく。他の人が問えば、自分も問う勇氣が出る。そこに対話の意義がある。

問いには、はっきりした答えのある問いと、そうではない問いがある。「富士山の高さは何メートルか」という問いには、一言で明快に答えられるが、「富士山はなぜ神々しいのか?」にはいろんな答え方ができるし、簡単には答えられない。

実際に明確な答えが出せるかどうかは、あまり問題ではない。たとえば、「この部屋に酸素分子はいくつあるか?」という問いは、大まかな数であれば、化学式を用いて計算できるが、正確には分らない。かといって、数が決まっていけないわけではない。

また中間的な問いもある。「日本人は何人いるか?」という問いは、日本国籍をもつ人の数を問題にしているのであれば、はっきり答えられるが、日本国籍をもつ外国人、外国籍をもつ日本人、世界のさまざまな国にいる日系の人を数に入れようとすれば、どのように答えるのか難しい問題である。

少し意味合いは違うが、「閉じた問い (closed question)」と「開いた問い (open question)」という区別もある。閉じた問いは、簡潔に答えられて、それ以上の説明を要しないもの、開いた問いは答えに説明を要するものである。

イエス・ノーで答えられるのは、**I** 問いが多いだろうが、人の意見を聞くような問いは、かならずしもそうではない。「死刑制度に反対ですか?」や「今の生活に満足していますか?」は、人によっても違い、簡単には答えられないので、**II** 問いである。

また、人によって、場合によって答えが違うからといって、**III** 問いになるわけではない。「あなたの名前は何ですか?」や「今何時ですか?」は、一言で答えられるので、**IV** 問いである。「夏休みはどのように過ごしたいですか?」というのは、中間的なものだろう。

一般には、思考力を育てたり、哲学的な対話をしたるためには、明確な答えのない問い、**V** 問いを考えるのがいいとされる。だが、かならずしもそうではない。たとえば、「死刑についてどう思うか?」という問いに対して、何の予備知識もなしに、ただたんに命の価値、罪と罰の関係、復讐、救済などについて自由に話していれば、対話したいは哲学的になりうる。しかし死刑について、より深く考えられるとは限らない。

歴史上、どのような死刑があったか、どのような罪に対して死刑が科されたか、現在死刑はどの国に残っていてどの国で廃止されているか、死刑はどのようにして廃止されたのか、凶悪犯罪に対して死刑の代わりにどのような刑罰をもって臨んでいるのか、現在日本で死刑はどのように行われているのか、死刑囚はどのような生活をしているのか等々、調べれば明確な答えが得られる問いはたくさんある。

どんな問題であれ、調べれば分かることは明らかにしたうえで問い、考えなければ、対話は糸の切れた風のように宙を漂い、あらゆる方向へ行ってしまう。それはそれで、新たな視点が見つかったり、意外な展開があつて予想もしないことを考えることができたりして、対話としては面白いし、哲学的な広がりも深まりもあるだろう。それもまた思考の自由さなのかもしれない。

だが、制御がきかないのは、自由さとは違う。確かな知識によって土台と軸が与えられれば、対話は焦点が定まった仕方ですでに深めることができる。

⁶ 知識だけ学んで問うことがなければ、思考はどこにも行かず、育つこともない。知識もなしに問うばかりでは、思考は方向を見失う。知識はそこからさらに問うてこそ意味があり、問いは知識によってさらに発展する。だから哲学的に考えるためには、答えのある問いとない問い、閉じた問いと開いた問いの両方が必要なのである。

* 呪詛……うらみに思う相手に災いが起こるよう神仏に祈り願うこと。

(梶谷真司 『考えるとはどういうことか』より)

問一 本文中の **A** **D** に当てはまる言葉として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

ア また イ たとえば ウ さて エ だから オ すると

問二——線部1「考えが前進する」とありますが、それはどうなることですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「何かいいことないかなあ」と考えたあとに「みんなにとって?」「誰にとって?」と問う対象を他人に限定することで、複数の答えを得られるようになる。

イ「何かいいことないかなあ」と考えるかわりに「誰にとって楽しいこと?」「自分?」と自分のために抽象的な問いを重ねることで、自発的に考えられるようになる。

ウ「何かいいことないかなあ」と考えるだけでなく「いいことって?」「誰のために?」という具体的な問いを重ねることで、別の角度から考えられるようになる。

エ「何かいいことないかなあ」と考えてから「つまらないこと?」「楽しいこと?」と反対の意味の問いを重ねることで、問いの答えが漠然としたものにならないようになる。

オ「何かいいことないかなあ」と考えてすぐに「自分にとって?」「みんなにとって?」「必要以上に問いを重ねることで、前向きに考えられるようになる。」

問三——線部2「実際には問いではない」とありますが、それはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 解消されることのない自分の中の思いが問うことをあきらめさせるということ。

イ 問いのような形だが自分の中では答えを求めているわけではないということ。

ウ 自分の中ではその問いが負の思いのせいで考えられなくなっているということ。

エ 不満や不安が大きすぎて自分の力では手に負えなくなっているということ。

オ そもそもその問いに関して自分自身は疑問を感じているということ。

問四——線部3「問いはより深くなり、哲学的になる」とありますが、何をどのようにすることで哲学的になるのですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問五——線部4「答えが出るかどうかは問題ではない」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 授業を受ける意味があるかないかは答えがあるわけではなく、問いを積み重ねることが大事だから。

イ 納得のいく答えが出ると怒りや苦しみが増幅ぞうぷくしかねないので、答えが出ない方がいい場合もあるから。

ウ 自分のもっている疑問を相手が受け止めてくれるだけで、恐れや怒りなどの感情が薄まるから。

エ 疑問に対して納得のいく答えが出なくても、授業を受けないということを認めてもらうことが重要だから。

オ 正しい答えを導き出すことよりもとにかく恐れず問うことで、不満や不安に打ち勝つことができるから。

問六 本文中の **I** **V** には、「閉じた」または「開いた」が入ります。「閉じた」が入る箇所には **A**、「開いた」が入る箇所には **B**と、それぞれ記号で答えなさい。

問七 — 線部5「かならずしもそうではない」とありますが、それはなぜですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問八 — 線部6「知識だけ学んで問うことがなければ、思考はどこにも行かず、育つこともない。知識もなしに問うばかりでは、思考は方向を見失う」とありますが、この内容と同じような意味の文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学ぶに暇あらずという者は暇ありといえども、また学ぶあたわず。

イ 学びて思わざれば則ちくらし。思いて学ばざれば則ちあやうし。

ウ 吾、十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。

エ 学びて時にこれを習う。またよろこばしからずや。

オ 少年老いやすく学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず。

問九 本文の要旨として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「問い」には答えがはっきりしているものと、そうでないものがあるが、「思考」を哲学的なものにするためには「問い」を重ねることが重要なので、対話を続けていくときには、とにかく答えに説明を要する「問い」をたくさん展開していくことがいいのである。

イ 「問い」が漠然としていっていると「思考」も漠然としたものになってしまうが、具体的に問うことによって「思考」はより具体的なものになっていくので、明確な答えが出るような「問い」を重ねていくことで得る確かな知識が、「思考」をより深めていくのである。

ウ 知識がなくても対話は哲学的になりうるが、確かな知識をもとにして考えると対話が定まった方向で深まり問いを積み重ねることができるので、哲学的な思考には簡潔に答えられる問いと簡単には答えられず対話が発展していく問いが必要である。

エ 「問うこと」は「思考」を哲学的なものにするために重要ではあるが、むやみに「問い」を重ねたからといって必ずしも「思考」が決まった方向に定まり、哲学的に深まっていくということはないので、何をいつ誰に問うかという「問い」の質が大切なのである。

オ 人の意見を聞くような「問い」は、思考力を育てるためには必要であるが、「思考」を深め、哲学的な広がりをもたせるには新たな視点や意外な展開が必要なので、明確な答えを求めるような「問い」を重ねて、土台となる確かな知識を身につけることが重要である。

【四】次の文章は、青山美智子『鎌倉うずまき案内所』の一節です。中学三年生の「わたし」と「乃木くん」は修学旅行で同じグループになったことをきっかけに仲良くなり、火曜日と金曜日の早朝に誰もいない理科室で話をするようになりますが、ある日同じクラスの「花音」と「瑠美」に二人の関係をひやかされた「わたし」は、「乃木くん」がいる前で彼の悪口を言ってしまう。本文はその続きの部分です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号も全て字数にふくみます。

次の日、わたしは借りていた本を紙袋に入れ、補習が始まるぎりぎりの誰も教室にいない時間を見計らって乃木くんの机の中に返却した。表紙に「ありがとうございます」と書いたポストイットだけつけてある。

わたしはもう、乃木くんの友達でいる資格もない。そう思った。救世主だったイエス・キリストの踏み絵を踏みまくった信者の気分だった。

本は読まなかった。そんな気分にはなれなかったし、乃木くんにつながるものを持ってはいけない気がした。

それからわたしは、火曜日と金曜日の理科室には行かなくなった。もともと、約束していたわけじゃないのだ。

そうしてわたしは、なるべく乃木くと目を合わせないようにして過ごした。

十二月に入ってすぐの放課後、教室を出ようとしたら乃木くんがわたしを呼び止めた。

「あのさ、ちょっといいかな」

ドア口で花音と瑠美がわたしを見ている。このあと三人で商店街のパン屋へ行く約束をしていた。パンをひとつ買うとクーポン券がついてきて、十枚集めればポメツピのお皿がもらえるらしい。花音はそれが欲しいと言って、わたしも誘ってきたのだ。

「俺、園森さんに話があつて」

「……急いでるから」

乃木くんは三秒ぐらい沈黙したあと、「じゃ、いつならいい？」と弱々しく言った。

その声がなんだか泣きそうで、わたしのほうこそもともと泣きそうで、今すぐふたりで理科室に行きたかった。

「いちかに告るんじゃない？」

瑠美が花音に言う。わざとわたしたちに聞こえるように。

わたしは乃木くんから目をそらしながら叫んだ。

「もう、話しかけてこないでー」

怒った口調になったのは、乃木くんにじゃなくて自分自身に腹が立ったからだ。

乃木くんの顔を見ることができなかった。本当にこれで終わっちゃったと思った。

花音と瑠美にくっついて、わたしは商店街で食べたくもないパンを三個も買った。レジでもらったクーポン券を花音に渡す。それは、わたしがこの仲良しグループにいるための引換券^{ひきかえ}だった。

それから三週間して、ホームルームで泉先生が言った。

「突然な話ですが、乃木くんが二期^{ふたご}期いっぱい転校します」

わたしはハッと顔を上げた。教室がざわつく。

今日は金曜日で、月曜日が祝日の振替休日だから週末を入れて三連休になる。冬休みは水曜日からだ。二期期^{ふたご}期いっぱいって、実質、今日を含めて二日しかない。

乃木くんはクラス全員から注目を浴びて、きまり悪そうにうつむいていた。先生が a と説明する。

「お父さんが急に転勤になって、東京に引っ越すことになりました。三年生のこんな時期だけど、逆に今なら東京の高校を受験することも支障なくできるからね。乃木くんの希望で、ぎりぎりまでみんなには言わないことで今日発表となりました。はい、乃木くん、みんなにひとこと！」

乃木くんは恥ずかしそうに立ち上がり「残り二日、よろしくお願いします」とだけ言って座った。

そんだけかよー、と湯川くんが言ってみんなが笑う。

そうだった。乃木くんって、みんなの前でペラペラしゃべる人じゃなかった。わたしに見せてくれたイキイキとした表情や、饒舌^{じょうぜつ}

な語り口は、彼が心を大きく開いてくれていた何よりの証^{あかし}だった。

乃木くんがわたしに話があるって、このことだったんだ……。

²わたしはぎゅつと奥歯をかみしめて涙をこらえた。ここで泣いたりしたら、花音たちに何を言われるかわからない。なんとも思わないふりをして、髪の毛の先をいじったり爪^{つめ}を見たりして、わたしは時間が過ぎるのを待った。

その週末、土曜日に親戚^{しんせき}の結婚式^{けっこんしき}があつて、わたしはお父さんとお母さんと三人で横浜に行った。

お母さんやサクちゃん^{*3}の従弟^{いとこ}である俊介^{しゅんすけ}さんが今回の主役で、わたしにとっては「いとこおじ」になるらしい。

わたしは乃木くん²のことで落ち込んでいたけど、サクちゃんに会えるのはやっぱり嬉^{うれ}しかった。シャーベットグリーンのワンピースを着ているわたしに、サクちゃんは「お姫様^{ひめさま}みたいだな」と言ってくれた。

式は教会で行われた。俊介さんのタキシード姿はかっこよかったし、花嫁^{はなよめ}さんもかわいらしくて、見ていだけで幸せな気持ちになった。牧師さんに導かれて新郎新婦^{しんどうしんぷう}は神様に愛を誓^{ちか}い、参列者のわたしたちは讃美歌^{さんびか}を歌った。

ひととおりの儀式^{ぎしき}を終えたあとは、コテージみたいな会場に場所を移した。一応、室内にテーブル席があつたけど、テラスの窓が全部開け放たれて庭に出られるようになっていいる。移動自由なガーデンパーティー形式の、素敵^{すてき}な披露宴^{ひろうえん}だった。

わたしはサクちゃんとふたり、テラス席に座ってケーキを食べていた。「なついている姪っ子^{めいこ}」のポジションを存分に活かし、彼を独り占め^{ひとじ}することに成功したのだ。こんな知能犯^{ちのうが}のわたしもいる。「おとなしい顔してやるなあ」って花音の言うことも、あながち間違^{まちが}いじゃないかもしれない。

「サクちゃんも、結婚したいって思う？」

そう訊^きいたら、サクちゃんはウーンとうなった。

「ただ結婚したいかって言われたら、わかんないな。いつか好きな人ができて、その人と結婚したいなと思ったらするよ、きっと」素晴^{すば}らしい回答。今、サクちゃんに好きな人はいないってことだ。わたしは姪っ子の顔で言う。

「そのときは、わたしまた讃美歌を歌うのかな」

わたしはポシエットから紙を出した。さつき教会で配られた楽譜^{がくふ}のコピー。讃美歌312番『いつくしみ深き』。

初めて歌った曲だ。オルガン伴奏^{ばんそう}に合わせて、聖歌隊が歌うのをまねるようにしてなんとか口ずさんだ。

楽譜をもらったとき、疑問に思った。「友なるイエス」っていう歌詞があつたからだ。

「サクちゃん、この『友なるイエス』ってどういうこと？ イエス様のことを友達なんて」

サクちゃんはなんでも答えてくれる。知っていることはていねいに教えてくれるし、知らないことは一緒に考えてくれる。サクちゃんの学校の生徒たち、いいなあって本気で思う。

「だって、イエスは人間だから」

「えっ、そうなの？」

驚^{おどろ}いているわたしに、サクちゃんは優しいたれ目を向ける。

「うん、イエスを神様だと思ってる人もいるけど、彼は神の使いであつて、人間なんだ。ヨハネの章だったかな、イエスがみんなに言ったんだよ。あなたたちは、私のしもべではなく友だつて」

そうなんだ。救世主は、友達だったんだ……。

「じゃあ、隠^{かく}れキリシタンは友達を踏んだのね」

なんだかそれって、神様を踏むよりもつらいことのような気がした。

b としていると、サクちゃんはわたしの頭にぽんぽんと手をのせた。

「どうした、いちか姫は何かお悩みか？」

「……姫じゃないの。わたし、侍女^{じしよ}なの」

サクちゃんは頭から手をおろし、そつと肩に触^ふれてくれた。こらえきれなくなつて、わたしは涙声^{なみだ}になる。

「みんなから外れないようにって必死で合わせてるうち、やつとわかり合えたはずのたつたひとりの友達に、ひどいことしちゃつた……」わたしはぼろぼろと泣いた。サクちゃんは、そうかそうか、と優しく肩^{かた}を抱^だいてくれた。テラス席の端^{はし}っこはちよつとした死角になつていて、庭にいるみんなは俊介さんのお友達^ひが弾^ひくバイオリンの音に聴^きき入っている。

「そういうの、わかるよ。中学や高校のうちは、どうしてもみんなが同じほうを向いていないと先に進まないような空気ができちゃうんだ。この五線譜みたいだね、ぴっちり決められた枠の中にいなきやいけなくて、自分がどこにいればいいのか見失ったりする。教師やつてる僕から見てもしんどいときあるよ。学校っていう大きな集団じゃなくて、もっと小さなところでひとりひとりと向き合えたらいいのになって思うこともある」

ちよつと意外だった。サクちゃんは楽しく中学校の先生をやっていると思っていた。いつか転職なんて、そんなこともあるんだろうか。

「人と違ってするのは劣っているってことじゃないんだ。それぞれがそれぞれでいいって、もっと X 性が認められる社会にしていかなきやいけないうって思うし、時間をかけて少しずつそういう時代になるって僕は信じてるよ」

サクちゃんは楽譜を見ながら言った。そしてト音記号³を指さす。

「ね、ト音記号の意味、知ってる？」

「えっ……」

サクちゃんの口からト音記号という言葉が出てきて、わたしの胸は高鳴った。なんだか、新しい素敵⁴なヒントを運んできてくれるような予感がしたのだ。

ここさあ……と言いかけて、サクちゃんは空のトレイを持って横切ったウェイトレスさんに「すみません、ボールペンありますか」と声をかけた。ウェイトレスさんはエプロンのポケットからペンを取り出し、サクちゃんに渡して庭に出ていく。

サクちゃんは楽譜のコピーをテーブルに置き、ト音記号にペンを入れた。

「このうずまきの中心のここ。十字架^{じゅうじか}みたいにくロスしてるだろ。ここが、ソですよってことなの」

「そうなの!？」

わたしが声を上げると、サクちゃんは意味ありげに「ソー」と言って笑った。外巻^{そとまき}さん並のダジャレらしい。思わず吹き出すと、サクちゃんはにつこり笑った。

「もともとは、この記号はアルファベットのGだったんだ。それが長い時間をかけて、この形に変わっていった」

「……アンモナイトみたい」

わたしはつぶやいた。長い時間をかけて、うずまきになっていくなんて。

アンモナイト? とサクちゃんは目を C させたけど、特に気には留めずに先を続けた。

「今はドレミファソラシドだけど、うんと昔はラで始まってたんだな。ラシドレミファソがA B C D E F Gに当てられて、日本の音符^{おんぶ}の読み方では、いろはにはへと。ということで、ソはG、日本語では、と、にあたる。だからト音記号のトって、ソのことなんだよ」

サクちゃんは余白にアルファベットとカタカナ、ひらがなを並べて表にしながら言った。

「すべてのことは変わりゆくんだ。無常っていうこと。このト音記号だって、千年後にはこの形じゃないかもしれない。始まりはドじゃないかもしれないし、線だって五本じゃなくなるかもしれない。でも時がたつにつれ状況^{じょうきょう}がどんどん変わっても、ソの位置がここだって、軸^{じく}がはつきりしていれば狂^{くる}わないだろ。名曲はずっと美しく奏^{かな}でられる」

そう言いながら、サクちゃんは『いつくしみ深き』のタイトルを指でなぞった。

「五線譜からはみだすのが怖い気持ちはすごくわかるよ。学校と家が全世界の学生のうちは、仕方ないことだと思う。でもね、ばかにされないように笑われないようにって、そっちを軸にして動くと、仲間外れにはならないとしてもホントの仲間は見つけにくいかもしれない。だから、誰に笑われたってへっちゃらって思えるような、いちかオリジナルの『ソ』の軸を持つといい。そしたらこれから先、どんなに状況が変わっても自分を見失ったりしないし、本当に大切な仲間を得られるよ」

サクちゃんはボールペンをテーブルに置く。

うずまきの中心の、わたしのソ。

わたしはサクちゃんの書き込みが入ったト音記号をじっと見た。

空いたグラスをトレイに載せて、ウェイトレスさんが戻ってくる。サクちゃんはわざわざ立ち上がって、ウェイトレスさんにお礼を言いながらボールペンを返した。

横浜のおばあちゃんの家で一泊^{いっぱく}したあと、日曜日の夕方、静岡に戻った。

振替休日の月曜日、わたしはショッピングモールに出かけた。

明日は乃木くと会える最後の日だ。ちゃんと謝って、ありがとも言って、何かプレゼントを渡したい。

男の子にプレゼントなんてしたことないから、何を選ばいいのかわからなかった。お金もそんなに、持っていないし。

本にしようと思いついて、わたしはモールの中の書店に向かった。[＊]黒祖ロイドの本は全部持つてるだろうから、図鑑とか、写真集とか。

店に着くと、文房具コーナーの隣に「化石フェア」というポスターがあつて、わたしは目を見開いた。この書店では時々、こんなふうに本や文房具じゃないものを一時的に置いているのだ。わたしはドキドキしながら台の上に置かれた化石を見た。化石って、いったいいくらで買えるんだろう。

マッチ箱ぐらいの小さなプラスチックケースに入つて、それらは行儀よく並んでいる。恐竜の歯、三葉虫、マンモスの骨。そして、あつた。アンモナイト。

薄茶色いのや、グレーがかつたのや、白っぽいのや。どれも五百円玉ぐらいのサイズだけど、ひとつとして同じものはなかった。わたしはよく吟味して、殻の模様が一番ぎゅつとつまつていて大理石みたいな色合いのアンモナイトを選んだ。

箱の隅に「白亜紀」と書かれた小さなシールがついている。一億四千万年前のそのアンモナイトは、わたしのお小遣いでもなんとかなる値段だった。千百円。消費税五パーセントを合わせて、千百五十五円。

それに手を伸ばそうとしたら、後ろから「いちか？」と声をかけられた。花音と瑠美だった。

ふたりは化石フェアの台とわたしを交互に見て、なにやら嬉しそうに笑つた。

「えつ、マジで？ 化石？」

「うわ、信じられない」

一瞬、足がすくむ。

でも、おとといサクちゃんを書いてくれたト音記号の書き込みを思い出したら、体がふっと楽になった。

わたしは黙つて、乃木くんに選んだ美しいアンモナイトの箱を手にとつた。

花音たちに背中を向け、レジに向かう。彼女たちがどんな顔をしているのか、何を言つてゐるのか、べつにわからなくていいって初めて思つた。

レジで店員さんに「プレゼントなんですけど、包装してもらえますか？」と訊いた。店員さんはこつと笑つて「承知しました」と言つてくれた。

書店の名前が入った包装紙でラッピングされた小箱を受け取るまで、花音たちは見ていたらしい。わたしが店を出るとふたりに待ち構えていて「まさか乃木にプレゼントするんじゃない？」と花音が言つた。瑠美に話しかけてるってスタイルで、その実、わたしに聞こえるように言っているのがわかる。

「男子に化石あげるとか、笑うわー」

瑠美がわざとらしくおなかを抱えた。

わたしは「また明日ねえ」と笑顔でかわしてエスカレーターに向かった。

おびえながらウソをつく必要も、何が悪いんだとムキになる必要もない。

わたしは化石が好きで、乃木くんも同じで、そんな話で盛り上がったふたりの楽しい時間を覚えていてほしいから、彼にプレゼントしたい。誰に笑われてもばかにされても、へっちゃらな軸。わたしの「ソ」は、ここ。しっかり足を着ける。

エスカレーターが下っていく。視界の隅で、花音と瑠美が d と立ち尽くしているのが見える。わたしはちよつと笑つて、

「うらやましがるなよ」という言葉を口の中でころがした。

- *1 ポストイット……ふせん。
- *2 ポメツピ……花音のお気に入りの、ポメラニアンのカラクター。
- *3 サクちゃん……いちかの叔父^{おじ}。横浜の中学校で理科の先生をしている。
- *4 外巻さん……いちかが修学旅行の時に迷い込んだ「鎌倉うずまき案内所」で出会った、ダジャレ好きなおじいさん。
- *5 黒祖ロイド……乃木くんの好きなSF作家。

問一 本文中の a d に当てはまる言葉として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

ア しゅん イ きよとん ウ しくしく エ てきばき オ ばちくり

問二 — 線部1「わたしがこの仲良しグループにいるための引換券」とありますが、「乃木くん」や「花音と瑠美」と「わたし」の関係の説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 花音と瑠美が男子と気軽に話すことを密かにねたんでいる「わたし」は、たまたま話しかけてきただけの乃木くんが告白をするはずもないのに騒ぎ立ててきた二人を恨めしく思い、乃木くんに八つ当たりをした後も怒りが冷めず投げやりな態度をとってしまっている。

イ 花音と瑠美がからかってくることを気恥ずかしく思っている「わたし」は、乃木くんのことが好きではあるものの素直な態度をとることができず、冷たくあしらってしまったことを悔やんでいたため、その気持ちを察して何も言わずにいてくれる二人に感謝している。

ウ 花音と瑠美のように自信が持てないことを引け目に感じている「わたし」は、乃木くんと一緒に遊びたい気持ちを持つ一方で自分をパン屋に誘ってくれた二人との約束を破ることもできず、両者の間で板挟みになってしまいどっちつかずな態度をとってしまっている。

エ 花音と瑠美に信頼してもらえているか気がかりに思っている「わたし」は、二人とパン屋に行きたいというのにしつこく話しかけてくる乃木くんをうっとうしく思いながらも、男子の誘いを決然と断ったことで二人に友情を認めてもらえたに違いないと確信している。

オ 花音と瑠美に仲間外れにされてしまわないか恐れている「わたし」は、乃木くとこれからも友達でいたいと考えているものの、男子と仲良くするところを見られて二人の反感をかうことを避けようとし、二人に気に入ってもらえるような態度をとってしまっている。

問三 — 線部2「わたしはぎゅっと奥歯をかみしめて涙をこらえた」とありますが、このときの「わたし」の心情を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問四 本文中の X に当てはまる最も適切な言葉を、文章全体をよく読み自分で考えて漢字二字で答えなさい。

問五 — 線部3「ト音記号」とありますが、ト音記号として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア



イ



ウ



エ



オ



問六 — 線部4「新しい素敵なヒント」とありますが、「サクちゃん」が伝えようとしたこととして最も適切なものを次から選

び、記号で答えなさい。

ア けんかしてもあきらめることなく友達と仲直りするべきだということ。

イ 名曲はいつの時代も変わることなく演奏することができるということ。

ウ 周りに流されることのない自分らしさを持つことが大事だということ。

エ 周りと波風をたてることのない協調性を持つことが必要だということ。

オ すべてのものは無常なのでつらい気持ちもやがてなくなるということ。

問七 — 線部5「ふたりは化石フェアの台とわたしを交互に見て、なにやら嬉しそうに笑った」とありますが、このときの二人の

様子について説明したものとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちに関係を隠していた「わたし」と乃木くんのことを疑っている二人は、転校する乃木くん「わたし」がプレゼントを用意しようとしているところを見て、仲直りしていないという嘘をあげると考え喜んでいる。

イ 大人びている「わたし」と乃木くんのことをうらやましく思っている二人は、「わたし」が転校する乃木くんへのプレゼントに化石を選んでいると知って、「わたし」の常識知らずな一面を言いふらそうと思いき喜んでいる。

ウ 自分たちに気後れしている「わたし」を下に見ている二人は、「わたし」が転校する乃木くんに渡すプレゼントを化石にしようとしているところを見つけ、また「わたし」をからかってやる話題が増えたと感じ喜んでいる。

エ 大切な友達である「わたし」が乃木くんを優先するのを苦々しく思っている二人は、「わたし」が二人の誘いを断ったのは転校する乃木くんへプレゼントをかうためだと悟り、「わたし」を責めるきっかけを得て喜んでいる。

オ 自分たちに劣る「わたし」が人気者の乃木くんと仲良くするのが気に入らない二人は、転校する乃木くん「わたし」が化石をプレゼントする気だと察し、乃木くんの好みも知らないことをばかにできると思い喜んでいる。

問八 ―線部6「わたしはちょっと笑って、『うらやましがるなよ』という言葉を口の中どころがした」とありますが、このときの「わたし」の内面を説明したものととして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「わたし」は周りの目を気にしてしまうのがつらく感じるのは学生の間だけで、社会に出ると当たり前になっていくので気にせずともいいと割り切った。そのため、花音たちに何を思われてもどうでもいいと考え、投げやりな状態になった。そこで二人に乃木くんへのプレゼントをばかにされても、反抗心はんこうが生まれることなく、大人の厳しさを知ってしまった苦しい気持ちでいる。

イ「わたし」は女友達のわがままに振りまわされ続けるよりも、一人でも自由にふるまえる方が自分の性分に合っていると感じた。そのため、花音たちのグループとはもう仲良くするべきではないと思い、二人をつき放すことができた。そして自分たちに歯向かった「わたし」に驚き、堂々とした態度におじけづいた二人を見て、優越感ゆうえつにひたり笑いをこらえきれない気持ちでいる。

ウ「わたし」は他人と違うところがあっても欠点だと思わずではなく、自分の個性として受け入れる態度が大切だと思い至った。そのため、花音たちと意見が合わなくてもよいのだと気づき、二人にはつきりと言いたいことを言えるようになった。それにより気弱だった「わたし」の成長を実感した二人と、気軽に軽口をたたきあえるようになり、喜びと安堵あんどに満ちた気持ちでいる。

エ「わたし」はうわべだけの友情にこだわるより、互いに理解しあえる友達との関係を大切にすることが自分にとって重要だと自覚した。そのため、花音たちに気に入ってもらえなくても構わないと感じ、二人と自然に接することができた。すると自信がわきあがり、想定していたのと違う反応を返した「わたし」に、肩透かしかたすかしを食わされた二人を見て、晴れ晴れとした気持ちでいる。

オ「わたし」は自分らしく生きることだけが正しくて、周りに合わせてばかりではいつまでも本当の友達を得られないと悟った。そのため、花音たちとは二度と一緒に行動しないようにしようと決め、気軽に会話を受け流すことができた。そうして「わたし」が仲良しグループから離れようとしていることに気が付き慌てる二人を見て、おかしがりながらも情けなく思う気持ちでいる。

問九 ―線部A「いちかオリジナルの『ソ』の軸」、―線部B「わたしの『ソ』は、ここ」とありますが、この物語では「ソ」とはどのように生きていくかという行動の軸として描かれています。あなたにとってこれまでの行動の軸としてきたことは何ですか。あるいは、これからの行動の軸としたいことは何ですか。一行にまとめて紹介しょうかいしなさい。また、そう思う具体的な理由を自分自身の体験を踏まえて解答欄とうたふらんに収まるように紹介しなさい。

令和四年度

栄東中学校入学試験問題

〔国語〕

東大特待Ⅰ（1月12日）



22T110

ここにシールをはってください

受験番号

氏名

解答用紙

（50分）

一

1

2

3

4

5

二

6

1

7

2

8

3

9

4

10

5

三

問八

問七

問五

問四

問二

問一

問九

問六

問三

A

B

C

D

I

II

III

IV

V

40

40

30

30

四

問九

問四

問三

問一

【行動の軸】

a

b

c

d

問二

問五

問六

問七

問八

60

50